

## 平成21年度長期社会体験研修修了報告書

研修者名 山口 智義 所属校種 中学校

研修先企業・部署名 株式会社 上毛新聞社 編集局

### 1 研修内容

- (1) 新人研修【4月1日～4月15日】【7月16日～7月17日】(研修場所：本社他)  
社会人としての心構えや業務内容、新聞社の社会的役割などについて研修した。  
主な研修内容：・入社式 ・各局長らの講話 ・社内見学、各局各部の説明 ・記事研修、写真研修、パソコン研修 ・号外配布 ・碓氷製糸、富岡製糸見学 ・尾瀬研修
- (2) 前橋支局の研修【4月16日～6月30日】【9月1日～11月30日】  
(研修場所：前橋支局、前橋市内各地)  
前橋市内で行われたイベントや人物の紹介などの記事を書いた。様々な分野で活躍する人たちの取材を通していろいろな考え方にふれることができた。  
主な取材対象：・各種展覧会 ・演奏会 ・地域イベント ・人物の紹介
- (3) 運動部の研修【7月1日～8月31日】(研修場所：本社、各競技場他)  
県内で開かれたスポーツの大会などを取材し、記事を書いた。ストイックに競技に打ち込む選手の姿に感動し、自分も頑張ろうという気持ちにさせられた。  
主な取材対象：・高校野球群馬大会 ・J2ザスパ草津公式戦 ・中体連総体  
・箱根駅伝を制した東洋大陸上部の強化合宿の密着取材 ・活躍が期待される選手の紹介
- (4) 写真部の研修【12月1日～1月31日】(研修場所：本社、県内各地)  
専属カメラマンから技術指導を受けながら、読者の“目”となって生の現場を撮影。1枚の写真を見ただけで現場の状況が伝わるように撮影するには、瞬時の適切な判断が要求される。その瞬間を撮り逃してしまうとやり直しがきかないため、綿密な計画を立てて撮影に臨んだ。  
主な取材対象：・1面を飾る季節の風物詩 ・前原国土交通相と住民との意見交換の様  
・ラグビートップリーグ三洋電機ワイルドナイツ公式戦 ・前橋工業高校選拔出場決定
- (5) 編集部の研修【2月1日～3月19日】(研修場所：本社)  
記者の書いた記事に、読者の目を引くような見出しをつけ、読者が見やすいように紙面をレイアウトする。記事を生かすも殺すも編集のさじ加減一つで決まってしまう。編集部で研修を受け、ようやく新聞づくりの全体像が把握できた。学級新聞や通信の作成に生かすことができると思う。

### 2 研修から学んだこと

- (1) 職場に還元できること「磨き合い高め合う人間関係」  
一つの記事が紙面に載るまでに多くの人がかかわる。記者が入念に行った取材を元に原稿を書く。記者は出稿までに何度も何度も記事を読み返し修正を重ねていく。書き上がった原稿を担当デスクとともにさらに練り上げていく。できあがった原稿は編集部でインパクトのある見出しがつけられ、紙面にレイアウトされる。随時、大刷りという作成途上の紙面が配られ、編集記者とデスク、局デスクらが校閲する。このように何重ものチェック態勢をとることで、より客観的で正確な記事にしていだけでなく、読者をひきつけるような紙面に仕上げていく。  
新聞社には社員同士が踏み込んで意見を言い合える雰囲気がある。遠慮なしに意見をぶつけ合うことで人間が磨かれていくように感じる。また、先輩社員からは後輩社員を一人前に育てようとする気概も感じられる。  
お互いの領域に踏み込むことは学校現場にはなじまないかもしれないが、他の職員と意見を交わしながら授業や学年経営等を練り上げていくことも必要なのではないかと感じた。日常的

に授業を見せ合い、意見交換をすることで新しい発想や自分では気づかなかった問題点を見出すことができると思う。

(2) 研修から得たもの、児童生徒に還元できること「生の現場を見た者の言葉の重み」

ともに仕事をする中で、新聞記者は知識が豊富なだけでなく言葉に重みがあるという印象を受けた。それは生の現場を見た体験が裏付けにあるからではないかと思う。

展覧会は作家が作品に込めた思いを丁寧に解説してくれる。サッカーの試合はシュートシーンを間近で見ることができる。自然災害の現場に行けば被害の大きさから自然の驚異を体感できる。いずれの取材先でも事情に一番精通した方の話を聞くことができるのだ。これは読者に真実を伝えるために与えられた記者の特権だが、学校では経験できないぜいたくな時間だ。

取材で受けた衝撃や感動を学校現場で生徒たちに伝えたい。また、生徒が「生の現場」を体験する機会を多く設定し、「本物の力」を肌で感じさせたい。

(3) 研修を通して自分が変わったこと「全力で打ち込む人たちに心打たれて」

箱根駅伝を制した東洋大陸上部の強化合宿取材した。柏原竜二ら主力選手は参加しないBチームの合宿だった。「何だBチームか」とがっかりした。監督とタイムトライアルに臨む選手たちを追いかけた。トライアル後半、車道に何人もの選手が倒れていた。トップチームに上がるため、倒れるまで自分を追い込んでいたのだ。柏原がいないことにがっかりしていた自分が恥ずかしくなった。敷島の記者室横の選手控え室から試合前になると地鳴りのような大きな声が聞こえてくる。試合に備える選手のウォーミングアップのかけ声だ。当たり前だがプロは何事にも全力だ。しかし、いくら本気でやっても結果が出なければそれで評価されてしまう。

これまで自分はプロ意識を持って仕事をしてきた、とっていた。でもその上をいく人たちを見て、自分もより高い志を持って仕事をしたいという気持ちが湧いてきた。

### 3 所感

今回の研修に臨むに当たり、「客観的なものの見方や簡潔で正確な言葉の使い方を身につけること」と「社会的視野を広げること」の二つの目標を設定した。

(1) 社会的視野の広がりについて

取材でのたくさんの人たちとの交流や体験により、世の中を広く、しかも間近で見ることができた。自分が今まで狭い世界の中にいたことが、外に出たことで初めて理解できた。

(2) 客観的なものの見方について

上毛新聞の方たちとの日常的な交流が刺激になった。文章表現はもとより、取材に臨む姿勢、記事に込める思いなど、手を抜いたところはすぐに見破られてしまう。問題があれば年下の記者でもきちっと指摘してくれる。自分は今まで、周りの人たちにそういった配慮をしていただろうかと反省した。歳を重ね経験を積むごとに、若い頃には見えなかったことが見えてくる。また、年齢や経験に関係なく自分自身のことは見えないものだ。職員同士で気付いたことを気軽に言い合えるような職場環境をつくり、自分の経験からアドバイスできることは積極的に伝え、逆に自分の考えや指導についてもまわりから意見を求めていきたい。

(3) 簡潔で正確な言葉の使い方について

新人研修で「記事は中学生が理解できる表現で書く」よう指導を受けた。一般的な言葉だけで単調にならない文章を書くのは実に難しい。これまでいかに難解な文章を書いていたのか考えさせられた。わかりやすい文章を書く。ごく当たり前のことなのだが目から鱗が落ちる思いがした。

(4) おわりに

新聞記者は、幸せな社会にしていくために世の中のための記事を書く。教師は、生徒が幸せな人生を自分の手で切りひらいていく力を育む。どちらも目指すところは同じで、主役は読者であり生徒なのだと思う。指示通りに動くだけの人間を育てるのではなく、自分で判断して行動できる人間を育てたい。そのために生徒には「判断力」と「行動力」を常に求めていきたいと思う。